

【三井寺】みゐでら（その2）

前回に述べたあらすじのように、謡曲『三井寺』は親子再会譚に属します。

親子再会譚については『折々の銘』16・17〈桜川〉で触れましたが、この曲も深層に思春期の子と母親の普遍的な葛藤が読み取れます。

親子再会譚の曲では、よく親子が離れ離れになる原因を人買の所為にしています。これは方便で、子の親離れを意味すると思われまます。

親離れを凶る千満が寺に入ったのは自立への道を仏道に求めていた証です。

そこへ物狂いとなった母親がやってきます。物狂いとは病理的な意味ではなく、狂った姿をして見物人を集める大道芸のようなもので、当時女性が独り旅をする術だったようです。手にする笹は狂女のしるしです。

当時三井寺には女人禁制の律があったはずですが。当然僧たちは制止しようとします。これは少年がすでに自立し、母親の理解し難い世界にいることを表しています。

母親は僧たちの制止を巧みな話術で振り切り境内に入ります。母親は必死に我が子のいる世界に分け入ろうと努めます。しかし、子の姿は見えません。

母親は「許し給へや人々よ。煩惱の夢を覚ますや」といって鐘をつきます。鐘の音で煩惱が祓われ、母親が狂気から目覚めたそのとき、親子は初めて互いの姿に気がつくのです。

三井寺の名鐘のおかげで、親子は新たな関係を築き連れ立って帰郷します。

この曲のキリ(能のエンディング)は『桜川』と類似し、帰郷した親子は孝行の徳により富貴な家になったということです。

親子再会譚は謡曲に限った話ではありません。

『新約聖書』は意外にもイエスの思春期の様子はほとんど伝えていません。

わずかに「ルカ伝」に書かれたイエス十二歳の話は、聖家族の再会譚です。

イエスはお祭の帰途に家族とはぐれてしまったのです。しかし、この出来事はイエスの家出ではないかと私は思っています。

「ルカ伝」によれば、お祭りのため少年イエスは家族と共にエルサレムに上京しました。しかし、祭りの後イエスは両親とはぐれてしまいました。両親はイエスがナザレの同郷の一群と共に帰途についていると思ひ込み、当初は心配しなかったようです。

しかしその後、所在がつかめず心配になり、帰路の途中から引き返し、ようやくエルサレムの神殿にいたイエスを見つけました。イエスは神殿で学者たちと議論を交わし、彼らを圧倒していたのです。

ここで注目すべきは、両親がイエスを見つけたのははぐれて三日後であり、その間イエスは両親

の元へ帰ろうとはしなかったことです。

それどころか再会を喜んだ様子もなく、心配していたマリアに「なぜ捜したのですか」と冷ややかに対応し、自分の父である神の住む神殿にいるのは当然だと言っただけです。

家出という言葉が適切であるかどうかはさておき、この出来事はマリアの庇護の元で生きてきたイエスの少年からの脱皮を示していることはまちがいないでしょう。

聖書はこの出来事を境に成人したイエスを描いています。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~